
妖幻抄 9章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 9章

【Zコード】

N1014A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

不調を訴えていた明が、ついに倒れた！瀕死の明を抱え、氷雨は、茫然とすることしかできなかつた。

絶（前書き）

いつも、維月です。
とうとう、明、倒れます。
最近、書いてて、キャラが壊れ始めてきたような気が
氷雨とか、何かへタしてきましたよ（汗）

拒絶

月光の許、静かに仄ぐ、夜の海の上空を、三人を乗せたヨリイは翔ぶ。内海なので、対岸までの距離は短い。

「じいさん、どの辺にあるんだ？その村」

氷雨は、瑰の方を振り返って尋ねた。

「ここからはまだ見えぬが、やがて谷が見えてくる、そこには儂らの村があるんじゃよ」

「ふうん……で、ここらの地理は、あんまし知らねえんだよな」

そう言つと、氷雨は首をすくめて見せる。

瑰は、人好きのする笑みを浮かべると、静かに話し始めた。

「氷雨は、どこから来たんだ？」

「東嶺の、栖庄つて村だけど……」

「この大陸が、棠・禹州・蘇・栖・嶺・東嶺・胡の7つからできておるのは、分かるな？今、丁度影の海を越えた。今いるのは、棠と

禹州の国境だ」

影の海とは、昼間は広大な平野として現れ、陽が沈んで、夜になると現れるというものだ。

「つてことは、俺の村が南東だから、西に向かつてたことになるんだな？」

「そういうことに、なるかな？」

天災により、國土は裂けて陥没し、7つの大陸を残してほかは、沈没への過渡を辿った。

「明？なんだ…寝ちまつたのか」

氷雨は、明の方に向きなおつて、声をかけた。

しかし、俯いたまま動かない明は、寝てはいなかつた。

絶え間なく、襲いくる激痛に歯を食いしばり、意識を保のに必死だった。

気が、遠くなる。

一体、どうしてしまったといつのだ。

これが、風邪の痛みとは、到底考えられない。

ならば、なんだというのだ！

この痛みは…

もう、目も、耳も使い物にはならない。

身体の中で、火でも燃えているようだ。

苦しい。

耳鳴りが、止まらない。

頭が、割れる。

今にも、体の内側から、壊れてしまいそうな気がする。

気づいてくれ、氷雨…

そのまま、素通りしないで！？

「よつほど疲れてたんだな、まだ着かねえみたいだし、ゆっくり休め

温もりが、頭を撫でる、氷雨の手が離れていく。

ち…がう…

違う！

体が、冷たくなっていく…

鉛みたいに、重くなつていいくのが分かる。

「ん、見えてきたな…あの谷だ」

瑰が指をさした先に、深くえぐれた、谷が現れた。

篝火でも、焚いているのだろう。

谷は、ほのかに明るかった。

「ミリ、あそここ村が見えるだろ？下りてくれるか？」

氷雨が言つと、ミリは一つ吼えて、ゆっくりと降下していった。

「明、起きるよ…じいさんの村に着いたぜ？」

振り起こされて、明はゆっくりと顔を上げる。

急に降りたつた鳥兎に、驚いた門番の少年は、鳥兎だ、と呟びながら

ら、一目散に村に走つていつてしまつた。

「まつたく、誰じや…^{きよう}皎なんぞを立たせおつて」

全員が下りると、ヨミはこつものよつこ小型化する。

少年が、逃げていつた方を見て、氷雨は顎をしゃくつた。

「あいつ、戻ってきたぜ？衛兵のおまけつきで」

言つよりも早く、あつといつう間に、氷雨たちの周りを、武装した男達が取り囲んだ。

「動くな！」

「な、なんだよつ」

余りの剣幕に、一步あとじわり、たじろぐ氷雨。

「同族のよつだが、この村に何用か！？」

男達の中でも、ひときわ大柄な男が言つた。

「なつ、何用つて…ただ、ヒトを送つてきただけだよ

「ヒトだと？誰だつ」

田の前にいる男は、自分と大して年も変わらないよつに見える。そう思つと、氷雨は面白くなかった。

ちらり、と明の方を見る。

彼女も、この待遇に驚いたのか、固まつているよつだ。

「つたく、そこには、じいさんだよ」

氷雨が顎をしゃくると、男は、氷雨を押しのけて、瑰の前に出た。

「族長！？今までどこにつ、散々搜したんですよつ？」

「はあ…雷宇よ、仕事熱心なのはよいが、口を慎むことだ。この方々は、儂の客分にあたる」

「しつ、失礼を、申し訳ございません！」

雷宇、と呼ばれた男は、慌てて臣体を伏せ、謝罪し始めた。

その様子に、氷雨は面食らつた。

「よ……顔を上げなさい雷宇、お前には、この方々の世話役を任せ
るよいな？」

「はーかしこまつましてつ」

明は、足元さえ定まらず、息をすむことも、ままならない状態だった。

背中を、いやな汗が伝つていぐ。

喉が、灼けるようだ。

声が、でない。

氷雨が、なにか話しかけている。

けど、もう聞こえないんだ…

目の前が、暗くなつていぐ。

氷雨の顔が、だんだんぼやけて…

あたし、死ぬのかな？

もう、なにも

分からぬよ…

「明！？」

突然、崩れ落ちた明を、氷雨は慌てて受け止めた。

明の瞳は虚ろで、焦点が、定まつていない。

ああ、氷雨が…あたしを、呼んでくれた。

もう、これで、会えないのかな？

そんなの

やだな…

手、赤い。

あたし、血を吐いたんだな。

「明つ、しつかりしろ！聞こえるか、明！」

うつすらと開いた目はうつるで、もう何も、見えていないようだつた。

呼びかけも空しく、明はゆっくりと、目を、閉じた。

彼女の頬を、一筋、涙が伝つた。

「明？どうしたんだよ…【冗談はよせ、な？起きり、起きてくれ…起きろ明、明う！？】

氷雨は、力一杯、明を抱き締めた。

しかし、反応は返つてこない。

触れた手は、氷のようだ、冷たかった。

信じたくない、信じられない！

明が、死んだ…

「明、明つ…起きてくれつ、頼むからあ

へたり、と座りこむ氷雨、震えが、止まらなかつた。

「バカ！何してゐる」

雷宇は、慌てて明を取り上げると、顎を逸らして気道を確保した。

「まだ息がある、こらヒヨコ頭つ、しつかりしろよーこの娘はまだ生きてるんだ、今は移動が必要だつ、立て、早くしろー」

雷宇は、明を肩に担ぎ、氷雨を引っ張りあげた。

「明が…生きてる？」

虚ろだつた氷雨の瞳に、光が戻る。

「そうだ、これから薬師の所に連れて行く、ついてこいー！」

走り出した雷宇の跡を追つて、氷雨は走り出した。

薬師の娘・倩菜（せんな）（前書き）

こんにちわ、維月十夜です。
読者さま方、こじままで、ご苦労様です。
倒れた明は、助かるのでしょうか？
今うご期待ください（＾＾）

薬師の娘・倩菜（せんな）

「倩菜、いるかっ、俺だ、開けてくれー病人がいる」石造りの家並みを、いくつも通りすぎ、同じような造りの家の前に、雷雨と氷雨はいた。

「はいはいっ、そんなに叩かないでよ雷宇、ドアが壊れちゃうわ？」「急に血を吐いて倒れたんだ、族長の客らしこんだが、診てやってくれないか」

扉を開けたのは、赤い髪を一つに結った少女だった。

「中に入つて、その子を、そこのベッドに寝かせてくれる？..」「わ、分かった！」

少女が、指をさした先には、鉄格子のついた、台のような物があった。

おそらく、ベッドといつのは、あれを意味するらしい。

「ここの子、同族みたいだけど…血を吐いたって言つてたわね、なにか…持病でもあるのかしら？」

「さあ、どうなんだ？ヒトノ頭」

「病気は持つてねえ…けど、寝不足とは、言つてた」

「寝不足で、血を吐くわけはない。どうしまじょうね…」

「倩菜、この子、なにか言つてる…」

雷宇が、明を指さして叫ぶ。

「え！？」

薬棚をあさつていた倩菜は、慌てて明の傍に戻った。

「ここのは、どこ、なんだ？」

「大丈夫、じゃないわね、あなた、どこのが苦しいか分かる？」「明つ！」

「待つてーちよつと黙つて、あなたは、雷宇と向こうに行つててちようだい」

身を乗り出した氷雨の背中を、倩菜は押しながら言つた。

「分から…な」

苦痛に、顔を歪める明。

明の瞳を診た倩菜は、事態の重大さに、息をのんだ。

「ひつ、ひどい…」この子が、『拒絶』を起こしてゐる…。どうして、もつと早く気づかなかつたのよ…。」

倩菜は、氷雨に怒鳴りつけた。

「な、なんだ？ その、拒絶つて」

氷雨は、おずおずと、倩菜に尋ねる。

「この子、目の色が薄れてるつ、これがどうこうとか、分かるわよね？ 妖の目の色が消えるのは、死ぬときだけ。この子の目の色がかろうじて残つているのは、この子が、それを拒絶しているから。このままだと、死んじゃうのよつ、分かつてゐるの…？」

「じゃ、じゃあ…どうすんだよ」

「この子の体に、拒絶を起しす、なにかが取り込まれた… とりあえず血を引えて、鎮静させなくちゃ」

氷雨は血と聞いて、長らく忘れていた、出立の夜のことと思いつ出した。

そうだ。

自分の母親は、明に、血を引えていなかつたか。

「やうだ、血だ！ 旅に出る前の晩、俺のお袋が、明に血を飲ませてた」

「体液の不適合ね、分かつたわ… それなら話は早い」

倩菜は、卓に置いてあつた小刀で、手首を切つた。

「雷宇、明さんの首の下に枕を置いて、口を開かせて？」

「お、おつ」

明の口の中に、いくつか、赤い雫が落とされた。

「これで、拒絶は治ると思うわ、よかつたわね？ ヒヨコ頭へさ」

「なつ、ヒヨコ頭じやねえ、氷雨だ！」

元のペースを取り戻した氷雨は、反撃することも、忘れてはいなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1014a/>

妖幻抄 9章

2011年1月13日03時00分発行